様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２４９０

研究課題名（和文）罪悪感の文学--マーク・トウェイン小説作品の自伝的基盤を探る

研究課題名（英文）Literature on Guilt: In Search of the Autobiographical Basis of Mark Twain's Fiction

研究代表者
里内　克己（Satouchi, Katsumi）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・教授

研究者番号：１０２１５８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：最晩年の小説『それはどっちだったか』を中心に、マーク・トウェインの作品における伝記的事実とフィクションとの間の相互交渉の様相を検討し、諸論考を活字および口頭で発表した。この作家が最も関心を抱く分身・罪悪感・人種といったモチーフが、絡まり合いながら一貫してトウェイン作品の特徴となり、初期の『ハワイ通信』『金ぴか時代』、中期の〈サイモン・ホイーラー連作〉などを経て、晩年の未発表作品群へと発展していく経緯をかなりの程度明らかにした。トウェイン作品の伝記的背景を知るうえで必須の参考資料である『自伝』については、1906年より雑誌連載されたヴァージョンを日本語に訳出し、書籍として出版を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
米国を代表する文学者トウェインについては、既におびただしい量の先行研究があるが、晩年の小説『それはどっちだったか』は重要でありながらほとんど黙殺されてきた。本研究はその空所を補う意義を有している。とりわけ、トウェインの初期・中期の作品群の延長線上に『それはどっちだったか』を定位することにより、それが作家活動の長いキャリアにおいてかなめの位置にある作品であることを明らかにし、トウェイン研究に大きく貢献した。また、『〈連載版〉マーク・トウェイン自伝』を訳出し、最新の学術的な知見に裏打ちされた解説や注釈と併せて出版することで、トウェインという文学者の新たな魅力を一般の読者に伝えることができた。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the unfinished novel, Which Was It?, this study examined aspects of the interplay between biographical fact and fiction in Mark Twain's works and presented various essays in print and orally. These papers clarified to a significant extent how the motifs of alter ego, guilt, and race, which are the author's primary concerns, became intertwined and consistent features of Twain's work and developed from his early works, including his correspondence from Hawaii and the novel The Gilded Age, through works of his middle period such as "The Simon Wheeler Sequence," and into his late, unpublished works. In addition, Twain's autobiography, an essential reference for understanding the personal background of his works, was translated into Japanese from a version serialized in magazines since 1906 and was published as a book.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：Mark Twain　自伝　罪悪感　人種　良心　分身

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究課題は、私が 2011～2014 年度に従事した基盤研究（C）の課題「未発表長編を基盤にした 19-20 世紀転換期マーク・トウェイン像の再構築」にその端緒がある。この研究は、半世紀以上前に公表されながらも顧みられてこなかった、トウェイン晩年の未発表長編小説『それはどっちだったか』Which Was It? (1899-1906 年執筆)に焦点を当て、同時期のアメリカ社会の動向を見据えつつ、その作品をトウェインの著作群全体のなかに位置づけようとする試みだった。その研究で得られた結論は、大きく分けると次の二つである。①まず『それはどっちだったか』という作品は、『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885 年)や『まぬけのウィルソン』(1894 年)といったミシシッピ川流域を背景にした盛期の代表作品群と、『人間とは何か』(1906 年)のような哲学的で厭世的な人間観を示した晩年の作品群とを橋渡しする位置にある。この作品をトウェインの〈隠れた代表作〉と位置付けることによって、晩年とそれ以前の間で作風に大きな断絶があると見られてきたトウェインの作家としてのキャリアが、途切れのないひと連なりの線として捉えられるようになった。②一方、『それはどっちだったか』は、元奴隷の混血男性ジャスパーによって主人公である白人男性ジョージ・ハリソンが奴隷同然の境遇に落とされてしまうという、衝撃的な結末を迎える。そこには明らかに 19 世紀アメリカの黒人問題が影を落としているが、ジャスパーの人物像は『トム・ソーヤーの冒険』(1875 年)で登場するインジャン・ジョーをモデルにしており、作者の考察の射程は、執筆当時、急速に駆逐されつつあったアメリカ先住民にも及んでいる。その点を手掛かりとして、作品に盛られた人種の主題をより掘り下げて分析すると、『それはどっちだったか』という長編は、トウェインという作家の私的な歴史と、白人・黒人・先住民が複雑な葛藤を繰り返してきたアメリカ合衆国の歴史とが切り結ぶ地点から生み出された特異な作品である、という結論が得られた。

しかし、先の研究から逆に浮かび上がった問題も幾つかある。その最たるものは、『それはどっちだったか』をはじめ小説作品の多くに盛り込まれている〈罪悪感〉という主題へのトウェインの奇妙なまでのこだわりである。『それはどっちだったか』の序盤で主人公ハリソンは意図せざる殺人を犯し、その秘密を誰にも打ち明けられないまま延々と罪の意識に苦しめられる。終盤で主人公ハリソンの前に姿を現わし恐喝するジャスパーは、ハリソン自身の抱えた罪悪感を擬人化した存在として描かれてもいる。トウェインのキャリアを遡ってみるなら、このハリソンの苦悶は、代表作『ハックルベリー・フィンの冒険』において、奴隷ジムを引き渡さないでいることにやましい気持ちを感じ、〈良心〉の痛みに苦しめられる少年ハックの姿をグロテスクに書き直したものだとも言える。それでは、どうしてこれほどトウェインという作家は、罪悪感や良心の咎めといった心的葛藤に過剰なまでにこだわるのか。そのように、小説作品のテクスト分析にほぼ限定された研究ではすっきりとした解答の出せない疑問が残っていた。

２．研究の目的

『それはどっちだったか』とほぼ同時期に書かれたトウェインの大部の『自伝』を詳細に検討すると、『それはどっちだったか』にはトウェインの実人生が思いのほか反映されており、登場人物の多くは、作者自身、そしてその家族や友人知人をモデルにして造型されていることが分かる。『自伝』には少年時代のトウェインが、外向きには屈託のない明るさを見せながらも、胸中では後悔や悔悛の気持ちに苛まれていたことを示すエピソードが散りばめられている。そんな二面性を持った〈私〉の姿は、『それはどっちだったか』での主人公ハリソンの裏表のある人物像に直結している。この小説では、ハリソンの抱える罪悪感を体現する〈もう一人の自己〉としてジャスパーという人物が配されていた。ハリソンは道徳的な意味での、ジャスパーは人種的な意味での二重性を持っており、二人には作品内の言葉を使えば〈混血〉(half-breed)という共通の形容を与えることができる。小説でのこうした人物間の関係は、『自伝』における、罪悪感を抱えながらも改心できないトウェイン（サム・クレメンズ）と、やはり改心できない「インジャン・ジョー」のモデルとなった実在の人物との関係にほぼ重ねることができる。このように『自伝』と突き合わせて再読すると、未発表小説『それはどっちだったか』は自伝的な要素がきわめて濃厚な作品であり、主人公の内的葛藤の由来を、作者自身の過去の精神的な葛藤へと辿ることができる見通しも立つ。

したがって、今回の研究目的は、新たにその価値が見出された晩年期の未発表作品『それはどっちだったか』の分析から示される知見から逆算するようにして、主題的に関連を持つそれ以前の小説作品へと立ち返り、検討し直すことにあった。その際には、ようやく刊行の完結を見たばかりの完全版『自伝』と本格的に突き合わせる形でそれぞれの小説作品の分析を行ない、フィクションと伝記事実との関係を仔細に分析していく。そうすることによって、これら小説作品に顕著に見られる〈罪悪感〉や〈良心の咎め〉といったトウェイン文学の核となる主題の変遷プロセスを明らかにしつつ、そうした主題が作者トウェインのいかなる内的必然性から選択されたのか、という問題に対して一定の答えを出すことを目指した。

本研究ではこのようにトウェインの小説作品の解明に重きを置いたが、そこで自伝テクストは小説を理解する上での参考資料という以上の意味を持つ。トウェインは『自伝』において意図的にフィクションを叙述に混入させることによって、〈嘘〉と〈真実〉の間で戯れる魅力的なテクストを作り出している。言い換えれば、小説作品と必ずしも明確な境界を持たない、一種のフィクション作品として読み得る可能性を『自伝』は孕む。したがって、小説作品の分析と並行して『自伝』それ自体も分析の俎上に載せ、その読みの可能性を追求していくことが本研究のもう一つの目的であった。

３．研究の方法

本研究の当初の予定は次のようなものであった、まず初年度に晩年の未発表長編『それはどっちだったか』と『自伝』との関係を明らかにする論考を発表し、それを基にして２年目以降は毎年１～２本のペースで『トム・ソーヤーの冒険』『ハックルベリー・フィンの冒険』を中心に盛期トウェインの小説作品を扱った論考を発表する。そして最終年度はそれらの論考を統合したやや枚数の多い作家論をまとめる。それと並行して、刊行されたばかりの完全版『自伝』の未読部分を分析し、2 年程度で完了する。完全版『自伝』や 1906 年連載の抜粋版『自伝』を単独で取り上げる論考も発表していく。特に抜粋版については毎年三分の一ずつ日本語に訳出し、最終年度で出版のための準備を行なう。随時海外での研究・調査活動も行ない、国際学会などで研究発表を行なう。

しかし研究を実際に開始してみると、方法自体に大きな変更はなかったが、盛期の小説よりも初期の作品群に、そして公に公表された作品よりも未発表の作品に光を当てた方が、より広い射程で実りのある研究ができることが分かり、分析対象を少なからずシフトさせることになった。また、日本ウィリアム・フォークナー協会第 22 回全国大会（駒澤大学）、日本マーク・トウェイン協会第 24 回全国大会（オンライン開催）でのシンポジウムの登壇、日本英文学会関西支部第 14 回大会（奈良女子大学）での招待発表、編著『19 世紀アメリカ作家たちとエコノミー ～ 国家・家庭・親密な圏域』（彩流社）での寄稿など、研究期間のなかでは予定していなかった論考発表の依頼が多くあったが、すべて本研究課題と絡めて取り組むことによって、自らの研究を拡大・深化させることができた。なお、2020 年春からコロナ禍が３年間続き、海外での発表・調査の機会を阻まれたのが残念である。

４．研究成果

本研究を通して明らかになったことを一口に言うならば、最晩年の長編小説『それはどっちだったか』およびその前身的作品である短編「インディアンタウン」は、唐突に起筆された突然変異的な作品では決してない、ということである。これらは先行するトウェインの作品群の延長線上にあって、書かれる必然性のある集大成的な作品であった。そのことを、トウェイン作品に特徴的な〈異人種としてのもう一人の私〉というモチーフと、創作の際にしばしば下敷きにされるトウェイン＝サム・クレメンズ自身の兄弟との関係という二点に焦点を当て、本研究の成果をできうる限り分かりやすい言葉でまとめてみたい。

『それはどっちだったか』には主人公が抱えた強烈な罪悪感、言い換えれば〈良心の責め苦〉いう中心的主題があり、それを表現するうえで二重人格ないしは分身というモチーフが人種という要素と絡めて活用されていた。そのような趣向はトウェインの作品のなかに多く見いだせるが、その萌芽は、1866 年に書かれたハワイからの通信書簡群にあると思われる。この書簡においては、「私」（サム・クレメンズのペルソナ）と「ブラウン」なる人物との虚構のやり取りが散りばめられているが、ブラウンは「私」にとっての内なる他者であるという位置づけがなされている。しかもその自己のうちに潜む他者は、〈野蛮な有色人種〉としての特徴を有している。トウェインはこのような特殊な一人二役の仕掛けを、トウェイン盛期の小説においても活用し、自身をモデルとした主人公の敵であると同時に、主人公の分身でもある人種的他者を描いた。『トム・ソーヤーの冒険』（1876 年）におけるトムとインジャン・ジョーの関係や、『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885 年）におけるハックとジムの関係はその典型的な例であり、トウェインはそれを更に発展させて、『それはどっちだったか』のジョージとジャスパーとの複雑な関係を描き出すようになる。

このように自己のなかに潜む〈内なる他者＝異人種〉という趣向を通して、主人公が抱く強烈な罪悪感を描き出すのがトウェイン作品の大きな特徴になっている。そのような感情にトウェインが過剰にこだわる背景には、様々な個人的要因が絡んでいると思われるが、1858 年に蒸気船パイロットのための修行をしていた際に、事故で弟ヘンリー・クレメンズを喪った出来事が、大いに影を落としているようだ。トウェインが初めて長編小説に手を染めるきっかけとなった合作小説『金ぴか時代』（1873 年）の第 4 章には、二隻の蒸気船が猛スピードで競走したあげく大惨事を招く、というエピソードがある。これはヘンリーの死によって引き起こされた心的外傷を文学作品として形にしようとするトウェインの試みとして読むことができる。ヘンリーは、この作家の初期から盛期にかけての作品を読むうえでの鍵となる人物である。『金ぴか時代』のみならず、『トム・ソーヤーの冒険』や『ミシシッピ川の生活』（1883 年）といった作品の検討か

ら、すでに死者となっていた弟ヘンリーが、自分にとっての〈良心〉ないしは〈もう一人の自分〉として、書き手サム・クレメンズのなかに内面化されていたことを推し量ることができる。

更に、未発表の作品までを検討の視野に入れるならば、弟ヘンリーだけでなく、兄オーリオン・クレメンズがトウェインの創作に大きなインスピレーションを与えていたことが明らかになる。オーリオンを作中人物として利用したと明確に同定できるのは、生前に出版された作品では『金ぴか時代』のみになるが、未発表作品では 1877 年執筆の「大馬鹿者の自伝」、1897 年の「ヘルファイア・ホッチキス」および「1840-3 年の村人たち」といった一連の作品で、オーリオンをモデルとした人物が描かれることになる。「1840-3 年の村人たち」との形式的な類似性を持った 1899 年執筆の「インディアンタウン」もまた、兄を描く試みであるが、同時にこの作品ではトウェインことサム・クレメンズ本人もまた虚構の人物として作中に登場する。それを基に書かれた『それはどっちだったか』では、兄の肖像とその弟であるサム本人の自画像は複雑に入り混じり、主人公ジョージと、その敵であり友でもあるソル・ベイリーのコンビの造形に反映されていく。書き手トウェインとその家族との関係をめぐる、きわめて私的な文脈から『それはどっちだったか』を再解釈することができたことは、本研究での収穫の一つと言える。

本研究は、最晩年の隠れた重要作『それはどっちだったか』からいわば逆算する形で、トウェインの作家としての歩みを辿り直す作業であった。通常、トウェイン文学の頂点は『ハックルベリー・フィンの冒険』であり、それ以降は作家として下降線を辿るとされる。だが、〈罪悪感の文学〉としてトウェイン作品群を捉えるならば、『ハックルベリー・フィン』は里程標ではあっても総決算であるとは言えず、その重要性を過大に評価しないよう気をつけなければならない。例えば『トム・ソーヤーの冒険』出版後、断続的に、そして長期にわたって取り組まれていた未完の小説『探偵サイモン・ホイーラー』は、これまで『ハックルベリー・フィン』を用意した作品という位置付けがされてきた。だが、作品後半部でせり出してくる、罪悪感に苛まれる主要登場人物の描写に注目するならば、『探偵サイモン・ホイーラー』はむしろ後年の『まぬけのウィルソン』(1894 年)、そして『それはどっちだったか』へと連なる作品であると考えられる。まだリサーチは十分であるとは言えないが、新たな視点からトウェインという作家の歩みを捉え直す長編論考を書く準備が整ったと言えるだろう。

以上のようにまとめられる諸論考の発表の他にも、小説作品の解読と並行して、トウェインの自伝的文章にじっくり付き合う作業も行ない、生前に発表された連載版の『自伝』を訳出・出版することができた。また、トウェイン自伝を研究対象とした副産物として、同時代のアフリカ系アメリカ人指導者ブッカー・T・ワシントンの『奴隷より身を起こして』(1901 年) を分析し、同時代アメリカ社会に向き合う書き手の複雑な態度を浮き彫りにする論考を発表することができた。小説でも自伝でも、活字となった文章の背後には、複雑な思いや葛藤を抱えた書き手がいる。分析を重ねることで、人間としての書き手の姿を決して単純化せず丁寧に浮かび上がらせることこそ、文学研究の使命であり醍醐味である――素朴ではあるがそんな思いが、課題遂行の進展とともに強くなっていった。様々な要因により研究成果を形にするのに時間がかかったが、自分なりの歩みで充実した研究を遂行することができたことをひとまず喜びたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 里内克巳	４．巻 58
２．論文標題 「この男、ブラウン」――マーク・トウェイン『ハワイ通信』における〈もう一人の自分〉の役割	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『中・四国アメリカ文学研究』	６．最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 里内克巳	４．巻 20
２．論文標題 〈書き直し〉のマーク・トウェイン――サイモン・ホイーラー連作を中心に考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『マーク・トウェイン――研究と批評』	６．最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 里内克巳	４．巻 47
２．論文標題 〈妥協の人〉の自画像――ブッカー・T・ワシントン『奴隷より身を起こして』における順応と抵抗	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『言語文化研究』	６．最初と最後の頁 67-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79325	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 里内克巳	４．巻 46
２．論文標題 川で起きた悲劇 --マーク・トウェインは蒸気船事故をどう描いたか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『言語文化研究』	６．最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/75490	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 里内克巳	４．巻 43
２．論文標題 改訂される事実とフィクション--マーク・トウェインの未発表小説『それはどっちだったか』の来歴を探る	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『言語文化研究』	６．最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 里内克巳
２．発表標題 〈妥協の人〉の自画像――Booker T. Washington, _Up from Slavery_ 再読
３．学会等名 日本英文学会第92回大会（ウェブカンファレンス）
４．発表年 2020年

１．発表者名 里内克巳
２．発表標題 〈書き直し〉のマーク・トウェイン――Simon Wheeler連作を中心に考える
３．学会等名 日本マーク・トウェイン協会第24回全国大会シンポジウム（オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 里内克巳
２．発表標題 川で起きた悲劇--Mark Twainは蒸気船事故をどう描いたか
３．学会等名 日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 里内克巳
２．発表標題 「この男、ブラウン」--Mark Twain,_ Letters from Hawaii_における〈もう一人の自分〉の役割
３．学会等名 日本英文学会関西支部年次大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 真田満、倉橋洋子、小田敦子、伊藤淑子　編著 [分担執筆：里内克巳]	４．発行年 2023年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 283
３．書名 『19世紀アメリカ作家たちとエコノミー ～ 国家・家庭・親密な圏域』（分担執筆：「我が風狂の兄――トウェインが描いたオーリオン・クレメンズ」pp.219-36）	

１．著者名 マーク・トウェイン、里内 克巳	４．発行年 2020年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 480
３．書名 〈連載版〉マーク・トウェイン自伝	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関